

国立国会図書館蔵 『物草太郎月』 翻刻

(翻刻／網野 可苗)

- 〔外題〕 果報寝待／物草太郎月 (刷題簽)
- 〔内題〕 なし
- 〔柱題〕 ものくさ
- 〔刊写〕 刊
- 〔数量〕 1冊10丁
- 〔形式〕 18cm
- 〔作者〕 唐来参和作 (跋文より)、〔北尾重政〕 画
- 〔出版〕 〔天明年間〕〔伊勢屋治助〕
- 〔序跋〕 唐来参和跋
- 〔蔵書印〕 3種 (所蔵者、瓢箪形、だるま形)
- 〔注〕 表紙見返しに墨書「更外題／優長源氏物草咄」

(1オ)

(地) 久しいものだがむかしく、ましば大領久吉公天下のぶしやうたりしとき、江しうの一城主六角左京の進よしかた殿、甚だ物くさき御生れなりしか、鷹がりの御ともにいてたまひ、何やらすこしはたきのすじにて、くわんぎよのあとへのこされ給ふ。こゝに又ふ破の伴作といふ浪人、これも同じくものぐさものにて、相応なる主人もつかへてちと足を休めんとおもふ。

(義賢) これ／＼らう人、ちとたのみたきしさいあり。身は久吉公の御ぜんを、大の毛せん故、例のとふりこのところにてはらをきるつもりだが、めんどうだからその方、身にはだをぬがせて、此刀ではらを切てはくれまいか。

(伴作) それはおやすい事だが、おまへのはらをきつてあげる位なら、わたしがあみがさのひもをむずびます。

(1ウ)

(地) 六かく家のかろうしよく名古屋や山三郎は、主におとらぬものくさ物にてほうこうはつとめず、内にばかりねていてゆめばかりみてゐる。

(葛城) めんどうだからゆめをみまいと思ふに、どふもゆめをみてならぬなどゝねごとをいふ

(伴作) なんだそれがしに下たのはなをゝたつてくれろ。

(山三) 武士に向つてふさほうせんばん、かんにんならぬ、といつては立てになるところだが、めんどうだからよそふ。

(2オ)

(伴作) おれがあるいてふみきつたから、はなをぐらゐはそつちでたつてくれてもよいわさ。

(地) 女はうかつらき

(葛城) うなされさつしやるを、おこしてしんぜるさへいやで、どふにもならぬ。けふはかみもしごとでもこれでおこふ。

(地) 下人岡平大ふせうものにて、はきそうじなどすることなければ、にははくさ生て、ごみたらけなり。

(2ウ)

(地) よしかた公は日ころ物ぐさきうへ、伴作すゝめられいよ／＼物ぐさきこと増長したまひ、何とぞ物ぐさの名人をかゝへ師匠にせんと、家中の諸士を召出して御評議ありければ、北のゝ鳥居さきに物ぐさ太良といふもの居るよしきゝ給ひて、雲谷を使としてよびにやり給ふ。又家中の諸士も、かみを見ならふせうものにて、だん正もうんこくものぐさきゆへ、わるだくみを思ひついてもめんどうなればせず、伴さくもいまはけらいとなりて、伴左衛門と↓※(三才)改名して、いよ／＼ものぐさきことをこのめば、当時のはきゝにて御家のはたをあづけ給ふ。以上三人共ぶせうでひげやさかやきをはやし、とりみだしてゐるゆへ、かたきやくのやふなれ共、むほんのこゝろざしはすこしもなく、御家万代不易と治る。みな／＼衣ふくなどもねまきのまゝにて、御前へつめる其中に、山三良は家のメくゝりをもするほどのぶせうものなりしが、けふ上下をいたためつけ、物ぐさの諫言をいゝて、かんきをかうむる。内心はほうかうが邪魔になり物ぐさくならぬゆへ、らう人してきまゝにせんといふそんじより也。

(義賢) 何山三良はかんどうだ。たつてゆけ。又伴左衛門は邪魔なそのはたをあつくる。うんこくは物ぐさ太良を↓※(三才)同道してこい、アゝさしづをするもめんどうくさいの至だ。

(地) だん正はもとよりおじごのことなれば、すこしたりぬ生れゆへ、うちにねて斗りゐる。

(雲谷) このわきざしのそりのうつたせへなをさぬ。きたの迄ゆくはとんだ所だ。物ぐさといふ名をわすれねばよいか。

(3オ)

(御前) 是からは内へいつて、はらさん／＼ねましやう。しかしたつてゆくも大義だ。

(伴左衛門) さあ／＼、めんどうなじやまものをあづかつた。うるさいこつたぞ。

(3ウ)

(地) 物くさ太良はきたのゝ鳥居先にたちているもむだなれば、ふだをだして、内にばかりいる。はせべの雲谷は主めいもだししかた使にたつなれとも、物おぼへわるければ、金魚やのきん八所よりもをとりよせ、物ぐさの心おぼへに、ものくさといふこじつけにてわすれぬやふに、刀のさきへつけて此ところへきたる。

(札) 拙者義此所に立居候も面倒ゆへ在宿いたし居候。物草御執心の御方御座候はゝ宅へ

御越可被成候。以上月日物草太良

(雲谷) どふても物くさの先生は了げんがちがつたものだ。しかしいゝつけなれば内までゆかすはなるまいか。

(4才)

(地) またのゝ歌の介はいもとのなでしこをつれて、例の通さまよいあるきわらんじのひものとけて、むすぶこともめんどうなりとて、四五日まへよりこのちや屋にこしをかけしが今に休んである。利きうが娘さへだはけふ此ところへきて、歌のすけをみてほれる。

(早枝) わたしかこのかたそでとおまへさんのそでとを、てん神様へ上たいから一寸きつてくださんせ。

(撫子) このこいおもひきろふと思ふが、さしあいをつたつてうしろをむくさへもういやてめんどうだに人のこゝろもしらぬ人さんだ。めんだふだからぐわんをかけやす。

(歌之介) なんだせつしやがかたそでをくれろ、のちにけんくわのときもじりへ引うけておちたときおひろいなされ切てあげたいがめんどうだ。

(4ウ)

(地) こゝに金魚や金八といふぶせふものあり。三百六十日ねていてくらしき思ひしところ、善五良といふ者しきかねの老母を仲人するゆへ、悦びてさつそくよびむかへける。女ばうはいのくま門兵衛に金のかたにつれて行しぶんにしてもらい、娘小みつとともにこつそりとねてゐる。

(宮城野) せけんのばかはおきてはたらくほんにねたほとらくはないぞ。

(老母) こんど六かく家ではたがなくなつたそふだからいつそ其のとうぞくになつてゆきやれ。しばられてろうへは入っているがらくでよかるう。御やくゑんへ候より、ねがふのなんのといふせわがなくてよい。

(金八) こいつは日本た。

(※その他汚損により判読不能)

(5才)

(地) 善五良はかへるがいやになり、さけにゑいたふりにして、だいところにてゐる。

またいのくま門兵衛も、金のかたに女ばうをつれてゆくもめんどうなれば、善五良といつしよにねころぶ。

(金魚) けふはやだ六のぶせうものめが、まだほうふりをくはせぬからひだるくつて、めがくらゝする。

(門兵衛) おれものちにきて山三にころされるより、ねていてらくをしよう。これでは善五良も注しんにはゆくまい。

(5ウ)

(地) 金八はよろこびはたのとうぞくとなのりければ、たれかかくとつれたりけん、よの中にはまめなやくにん有て、さつそく金八をからめてゆきければ、あとへ山三来り、

いさいの手だてをはなしてきかせるも、めんどうなればしらぬふりてゐる。

(宮城野) わかマ、でもわたしもいやだから、惣名代にこみつをつねつてなかせませう。

(老母) その刀には大ぶ物がたりがあれ共、めんどうだからこんどはなしまけふ。これ姫女わかマ、にそなたないて下され。としがよつてはそれさへいやだ。

(山三郎) 母じや人にはしかいなさる所だろふが、めんどうならよしになさりませ。

(小みつ) かゝさんいたい。ワア~~~~。これでもうかんになしな。

(6才)

(地) 山三が下も部岡平は方々使にやられるをものうく思ひ、金八がらうへゆきしことをうらやましく思ひ、へいの破へはいり盗人のぶんになつて、ろうしやしてらくをせんと思ふ。

(岡平) 状ばこは口にくわへふところをしてみなへはいろ。エ、ちへがでた。

(地) 此六角やしき金八あれど、たれもせわのやきてなければ、へいも何もくづれしだいな。

(犬1) 何やらあやしいやつた。てめへおきてほへやれ。

(犬2) めんどうた。いつそいぬぶんにしておきやれな。

(6ウ)

(地) 物草太良は二三日やとはれつとめている内、かつらきを呼出し山三かありかせんぎするやくなれ共、かつらきをよびにゆく人かなければ、さいわい岡平に女のかつらきさせて、少しこぢつけなれども、かつらきと名をつけせんぎする。

(太郎) おれもかみしもを引かけてそこへ出る所だが、めんどうだからさいわい状とといしをまくらにして、ねながら問ふ。

(岡平) 此岡平めも手をだしてはらを切ますより、かつらきをきせてもらいまして、ふところをいたしておりますがはるかよふごわりますでねいごわります。

(7才)

(地) うたのすけ、なでしこ、そのゝちあいの山を降であるきしがめんどうになり、三弦もこきうも一つにからけて兄弟にてぼうづ持にして歌も何もうたわずに、だんまりにてあるく。

(早枝) をや／＼たしかみ申たやうだね。ての内をだしてあげるもめんどうだから、内へおはいりなすつてもつておいで。

(撫子) 此家のあるじ利久さんは坊ずらしいものだから、もうかわんなさい。兄様ん。

(歌之介) もちつともつて、いや此内へはいつてから、おれがかわらふ。

(7ウ)

(地) あしや姫は何ことをし給ひしや。兄よしかた公の御きにそむきたまひて、利久が内へ下女ぶんに給ひしを、おぢこのだん正きゝいだし、物草太良に首打てきたれといゝ付しを、外ならば行ねどわがうちゆへよきさいわいと、あしやかまをもつて来るはづなれとも、物おぼへかわるくわすれたれば、茶のゆもむだと炉へこたつをし

↓※(八丁才) かけてかへると、そのまゝねてはかりゐる。

(歌之介) たれぞねる

(撫子) 身かわりにたいたいいつそ

(歌之介) ねむたい

(柵) うんこくさんもふ来るはずだそふだ。めんどうふだ。とつてことわりてがみまいり
ました。およろこび遊ばや。

(早枝) うたの介殿を見るとこん礼かしたくなくて、めんどうだから、めんないちどりを
かけたでけつくよい。

(8才)

(太郎) それをもつてゆくふうでもなし。どふてよしかたがあらためもせまいから、手ぶ
りでもつてもずいぶんすむ。しかしおれがやぼにかへることもないさ。

(歌之介) いかに物ぐさ、たしかにきけ。めんたうなれば、さへだがくびはきらぬ。その
かわりに此とうぐわをくびのぶんにして、もつてかへりやれ。

(芦屋姫) しづのてわさもほねのおれたものた。モウくいやゝのく。

(8ウ)

(地) 伴左衛門がやしきにては、とが人金人をあづかり、じしんにはたのありかせんぎす
るはずなれど、めんどうなりとて、めう代にしんさんのいし塚げんばにたのみ、ま
い日くところをとつてねて斗ゐる。へいとなりはいろざとにて、きん人が女ぼうと
きてゐる。座頭でうしげも三みせんはおしへず、小みつにかたをもませていねむつ
てばかりゐる。

(金八) 玄ばさんなんとうら山しかろふ。またかういふらくなきやうがいは外にはない。

(玄馬) 伴左衛門がすいしやうの躰でてまへにみつをのませてくれろと預かつたか、めん
とうだからのますに、いつれそのかわりにはまたついにせめたこともないよ。

(9才)

(小みつ) もうくたびれていやになつた。

(座頭) これ小みつ、しまつたらとゝさんにまんまをもつていつてあげや。おれはめんど
うだ。

(宮城野) あとではら／＼とたゝいてくりや。

(9ウ)

(地) 六角家に代々伝るけいづのはたは、先に伴左衛門に預けたまいしをみなく物覚へ
わるく預りし伴左衛門も預しよしかた殿もわすれ給ひて、ふんじつせしとおもひ方
く御せんぎありしに、おおかたおくに御せん少し物覚へよく、たしか伴左衛門に
預しやふに思ひ給ひ、伴左衛門が内をさがさせ御らんありければ、よぎのそでより
御はたいでる。金八は、名古やさん平、玄ばはせつき瀬平にて山三があいづをまつ
て、よし丸きみをいたきていづるところなれど、まつているうちがめんどう※(十
丁才) でたいくつなれば、あいつにかまはず竹やりをもつて出てすはつている。ま

づみはたもいでければ六角家治りこのゝちねてゐてくはほうをまち給ひしに、おびたゞしく金銀ができふつきに行末さかへ給ひけるこそめでたけれ。

山三もけふ此所へきたり幸いと奥がたのりものに一ね入りやりて、めんどうながら浄るりのすじをまじくなつておく。

(金八) 手をだしてかく申もめんどうだから、わか殿をはだにおぶい申が上々吉だ。

(玄馬) 春のゝに相さるきらすのア、なんとかいつたけへがわすれた。

(?) 此竹「やり」は□：はあるまいそ□で□ては物が丸く治らぬ

(※汚損のため判読不能)

(お国御前) ヲヤ／＼けしからねへ、とんだ所からでた。それみやれ、おぬしがところにあつた。

(伴左衛門) なるほど、そふおつしやれば、せんどおあづかり申した時、たもとへ入てふんどしととりちがへて置た↓※(十丁才)ので御ざりませふ。

(10才)

(山三) これ伴公此小づかをき殿のきゝうでへちよつとくりやれきうしよをよけてねらうがめんとうだ。

(10ウ)

性の鈍き人を物くさといひ、愚「おろ」かなる人を太郎といふ。さすれば物草太良は耆人の名にして一人には限「かき」らざる哉。今や此双紙「そうし」其意を種とし、五段続「つゝき」の浄瑠璃「しやうるり」を纒「わづか」紙数十帖「でう」にけんじ、物草太郎月はなの下ののどけき日ふせうぐゝに筆「ふで」を採「と」る穴かしこ。 唐来参和

*『物草太郎月』翻刻にあたり、快く許可して下さいました国立国会図書館に厚く御礼申し上げます。